

1916年 (大正5年) [12歳]

「辰雄日誌1916」No. 3 (その二)

—— 1916年9月1日～11月19日 ——

小池辰雄

高等師範(現筑波大学) 附属中学校 1年乙組

○1916年9月1日 (金)

晴天。学校の始まるのは7時だか8時だか、はっきりして居なかったもので、まず安全な方がよいと思って7時のつもりで家を出た。やはり7時でよかった。講堂で式があった。それは夏休の結果やこのごろはやるコレラや、2学期からの注意等の事であった。級室へ入ってから担任の先生から御話があった。それもよくわかった。その次に休みがあつて、いよいよ2学期の一番初めの事業〔授業〕を行つた。国文読本を二度つづけて大阪市をやつた。家へ帰ってから足を見れば、靴ずれと豆が出来て居た。靴ずれは、上の皮が皆はげて赤くなつていた。あらつてばんそうこうを張つておいた(二つ)。学校のことであるが、国語の宿題は、出した人は僅かであつた。僕も出した。英語の宿題も出した。暑いので頭を長い間、水に濡らした。また体もふいた。湯にも入つた。

○1916年9月2日 (土)

晴天。博物の時間は先生のこの夏休のお話などであつた。僕は今日、宿題をだした。数学の時間、頭がぼんやりしてちつともできなかった。体操をやつて精々した。国語はよくわかった。帰宅してから数学の問題の筆記したのを見てやつた。するとたやすく皆できた。2時間半ほど昼寝をしたのでよい氣持になった。明日は玉川へ行くので天気になることを祈る。復習も早くすんだ。夜、戸を開けてねたが、星の姿は見得れなかった。

○1916年9月3日 (日)

朝、曇天、10時頃より晴天となる。愉快なる一日。5時頃、目を開ければ雨はざあざあを音をたてて降りつつあつた。僕は失望してしまつた。その中に雨はやや小降りになった。時は7時半頃。武田君が8時までにくるはずになつていた。兄はあきらめて床に居た。その中に雨はまずやんだが、天候は危険であるが、兄は晴れたので行つて見ようといったので、僕も一緒に出掛けた。もし皆が行かなかつたら武田君の家へ遊びに行くつもりであつた。上の図の如くに出た〔家から武田君に出逢うまでの地図あり〕。僕達は坂を下りて、細い道を行くつもりであつた。武田君は晴れたので来たのであろう。大きな道から来た。折よく坂の下でぶつかった。一足の早い遅いで大変な事になる所、よかった。兄は電車で新宿の京王



電車の終点に行くといってそのまま行つた。それで僕も用を言いつかり、弁当をつくつたりして、武田君と電車に乗って新宿に行つた。それまでたびたび雨が来た。家を出る時も降って居たけれども、傘も持たずに出了。それから京王電車の所を車掌に聞いて、大急ぎに急いだ。皆は待つて居られた。玉川へ行く僕等は青木君の一番上の兄〔長男三弦、一高3年〕と青木君〔4男四郎、中学2年〕と青木君の弟〔6男泰彦、尋常小3年〕と今の中学5年の吾妻さん、兄と武田君〔尋常小6年〕と僕である。皆で7人である。複線の所や単線の所があった。まず単線が多く、初めは人家の中を進む。タンクも途中で見た。随分壮大なものであった。石黒先生の御話しになつた、All eyes, All ears〔全集中力を注ぐ〕ということも思ひうかんだ。人がタンクの上に乗って居るのも見えた。非常に小さかった。その中に両側島や水田の所に出る。水田の所にくれば、麦は丈高くなつて青々と静かな涼しい気持のよい音をたてて、波をたてて居る。あまりあるので麦の香がするかとも思われる。電車は早く、風は窓から十分に流れ通る。車内にさえ一つのごみもたたない。そのうちに向こう側の人の肩へ日光うすくあらわれた。僕等は非常にうれしかった。よほど景色をながめ行く中に、終点の調布についた。此処は玉川の上流である。1町程行くと小川に出る。そこで川の中を見ると、鮎など魚が泳ぐのが見える。それより半町ほど行くと玉川に出る。茶屋があつたが上流の方に行つた。河原をつたつて行くうちに僕のはなおが切れた。しかたなく、またじぎなので徒跣^{はだし}で進んだ。ある所で着物をぬいだ。そこは河原の上である。大急ぎでぬぎ、喜びを顔にたたえて川に足をつけた。その時の愉快さ、嬉しさ、何ともいえない。唯だその時を思ふばかり。まもなく泳ぎ始めた。時は10時。初め長くはいつてはいけないので、すぐあがつて、日にあたつた。日は照り出してあついで泳ぐのには十分適当して居る。昼は7人、円を描き傘を天幕のかわりにした。昼飯のうまい事、何ともいえない。泳ぎの稽古にもなつた。また愉快でもあつた。僕達は流れにさからつて行くと、一寸も前に行かない。かえつて後へ行く。下るときの早さは非常に早いものである。下りにそつて行くのも面白い。3時半まで川にはいりつづけであつた。小うなぎを三人でとつた。八つ目うなぎといつて僕は初めて見た。これもAll eyes, All earsの中に入っているであらう。水眼鏡で床を見ると水が奇麗で石がかぞえられるほどはつきり見える〔水眼鏡をかけて川底を見るスケッチあり〕。3時半頃、玉川を発した。また泳ぎたくなつた。残りおいしい。玉川を見すてて調布に來た。すると丁度、電車が来てすぐに発することができた。新宿へつくとへんな気持がした。暑い電車に乗つて、飯田橋で乗りかえ大曲でのりかえた。そこで武田君とわかれた。飯田橋では青木君などとわかれた。大曲の橋で子供が大勢でとんぼをたくさんとつて居た。5時半に帰宅した。母は一日で焼けて來たといわれた。顔を見ると、焼けて居た。ああ実に愉快に一日をくらしした。くたびれたので早くねた。



○1916年9月4日 (月)

晴天。ねむかった。6時に目がさめたがあまりねむいので6時20分までねた。15分前に家を出て、剣道の道具をかついで出た。学校へつくと、肩と背がひりひりしたが、一時の事であった。修身の時間の後の、松本君の読みかたは明白で力がいって居てうまいと思った。今日、国語の文は気に入った。運動をすると汗が出るので、しずかな運動をやっている。岡山君と伊藤君と一緒にかえった。復習は一通りやった。9時半ごろ床にはいった。母と兄は外に夜まで出掛けた。(2時半より)

○1916年9月5日 (火)

晴天、風吹く。夜の月清し。2時間目の歴史は随分、複雑していたような風に思われる。朝寝した為に遅刻をした。7時に家を出た。大急ぎであるいてきた。清水谷と大塚の間辺から走りだした。後から来た電車には首藤君がのっていた。大塚にきたときは、時計を見れば7時5分である。僕は驚きなおも速力をはやめて走って、先の首藤君に「おそいぜ、おそいぜ」と忠告した。上教の方にも大変なので、走りながら礼をした。門より見れば、今や列も整うところ。全速力で三人でかけた。近くなるころは列も整い、横より見れば横体にきれいに見える。列より5、6間の辺と思うが「キオツケー」の号令、耳にいたくひびく。僕は残念と思ったがしかたがない。遅刻のしるしに入ったのである。生まれてはじめての遅刻と思えば残念の極、しかしあまりひどくない遅刻でよかった。嗚呼、実に1分の差にもならない所であった。

家へかえるとすぐに洋服をぬぎ、はだかになって頭と顔に水をどうとかけた。からだはふき、足は洗った。博物のたまっていた、ぬるところを塗り、復習をした。すると坪井君と中島君が突然遊びに来た。トランプなどして遊んだ。5時10分ほどに二人はかえった。晚餐を食して、ちよつと外へ出ると西の空でいなびかりがする。みれば黒雲、空に一面はついていた。雷の音もしない様子。母が、雨が降らないいなびかりは麦のためによいのだとおっしゃった。一方を見れば、月が澄み渡った。一面の空に潔く明らかに上られておられた。丁度、二階にすれば前の木の影より光をもらし、その所の小枝はつきりとうつる。これからは秋にもなり、月の夜の景色は益々よくなる。国語の復習、予習をすまし、この日記をつけたのは9時半。あくび一つ出る。

(学期新となり、日記帳新となり、内容また新しき色を帯ぶ。日常の生活が All eyes, All ears である事を大にうれしい。)[短評]

○1916年9月6日 (水)

晴天。今日は家をはやくでた。数学は、貨幣を見て1時間費やした。今夜ものどかな月夜であった。



「のどかな」の形容詞はあたらす、冴えたなどとすべし」〔短評〕
天気つづきで雨の降る日を見たい。また僕に誰だかあざなをつけた。

(何という?) 〔短評〕

○1916年9月7日 (木)

晴天。地理、今日で神奈川県が終った。兵式体操の時は日がかんかんと照り、その上、上衣を着ているのでなおさら暑く感じた。家へ着くと直ちに服をぬぐ。シャツはべたべたになるのですぐあらつてもらう。次の日はそのしやつを着ることが出来る。水で体を清めて二階に上る。家の中にいるときは常に水衣を着る。勉強もしやすい。二階は午前中は涼しいが午後からは日が入り風もくるが暑い。戸を2枚張る。このごろは夏雲も認めない。

○1916年9月8日 (金)

晴天。今日は英語の格言 (English Proverb) を五つならつた。今日は別に書くことがあります。

○1916年9月9日 (土)

晴天。博物はあさの続きであつた。上村君は休んで前の方をしらないから、博物清書帳をかして上げた。数学は年月に関係した事をうかがった。その次に体操があつた。なお次に国語の時間があつた。僕もねむかったが、前の晩に予習をしたため、元気づいて手は上げた。午後2時に家を出て、青木君の家へ行つた。今日は青木君の一番上の兄 (三弦、一高3年) の誕生日である。武田君はまだ来て居なかつた。雑誌などを見た。夜6時頃だと思ふが、日はその時最早没して居つた。その時、青木君 (四郎? 中学2年) と武田君 (宣彦、尋小6年) と青木君の弟 (6男泰彦、尋小3年) と僕とで鬼ごっこをした。青木君の弟は裸になつたが、僕等は白い着物を来ていた。これが黒いとな面白かったのであつた。吉原の家と青木の家とは庭がつづいて、はさみうちにしたりすることが自由で、面白く遊んだ。その前に吉詳寺の前の松のはえた日陰の所でボールをした。7時頃、夕飯をいただき9時半まで二階で愉快に遊んでかえつた。

僕の兄と姉と武田君と僕。下車して家の前の通りで月を見た。月よりよほどはなれた所にぼんやりと円をえがいていた。兄にきくと、月のかさということをやがった。僕はまたどういふわけでああいう様になるのか問うた。水蒸気のぐあいであることをうかがつた。かえるとすぐに床についた。

(斯くして一つの新知識を得た) 〔短評〕



○1916年9月10日 (日)

風強く吹く。6時に目がさめた。昨日の夜、すごいこわい夢を見た。それは強賊20人ほどに僕と青木君と武田君の三人が追いかけられたことである。青木君と何処にかにげてわかないが、僕等は遂につかまったのである。それまでを思い出すと、随分苦戦をし或はにげる方法など考えてにげた。僕はこわい夢を見ると、すぐに足をはねる。そうすると空中へふわりふわりとはねる度に上るのである。追いかけられたときなどは大ていそれで上つてにげる。昨日の晩ほどすじのたつた夢はなかった。これは胸部に手をあててねたからである。目がさめると夢だからいいと思つて、また頭を枕につけてわざと胸に手をあててねた。1秒もたつたかたないうちに、さっきの夢のつづきを見た(書きだせばなくなるからやめよう)あまりにこわい夢を見たので、起き上がったときもまだ目にちらついていた所にねたので即ち続きをみる。東京の郊外あたりのことである。僕等も昼のごはんをたべると賊にいわれたのでたべた。その中途、敵のすきを見て僕は尽力を尽くしてにげた。そのためついに逃れることができた。僕はさっそく警察署にとどけた。これから探偵など皆、出発するところという所で目があいた。時計を見れば8時半。びつくりしてとびおきた。

今日はどこにも行かなかった。午前9時15分から正午までに勉強を終わらして、午後から本を晩ごはんまで休んだり読んだりした。9時に家の湯に入った。今日は縁側等ざらざらして足の裏をふいたり戸を張ったりした。夜は物凄くいほど風がごうごうなつた。兄のおかえりになるのを待ちながら月をながめていた。10時に床にはいった。夜は日中の様にほこりは一寸もたたない。唯南西の風、塞き感じを覚えるばかり、涼しく吹く。今夜の月もかさをかぶり相当に円く、そのかき、あだかも虹の如くに色どつていた。丁度、白雲がそこにあらわれてうつる。その美観実に秋に適當している。僕も写生したいと思つたが僕の様な筆では書き得難い。眺め終わつて時計を見ると10時10分。それから戸をあけたまま寝しずまった。風はあたまから足まで流れとおる。

(わざわざ夢を見るなどはよろしくないぞ) (短評)

○1916年9月11日 (月)

風前日の如し。二百二十日。朝起きれば、戸はいつのまにか閉まつていた。そこで開けた。学校より帰つて、国文読本を読んでいたらば、母が手紙を出しておくれとおっしゃったので、僕はすぐに走つていつて来た。二百二十日も事なくすみそうである。しかし風はひどかった。二百十日は無事にすんだ。夕飯前また手紙の御用をいいつかつた。夕食をすまして、靴をみがき、兄といつも一緒に散歩かたがた、電球を買いにいった。帰りに下駄をかつた。今夜の月をみれば、十五夜にほぼ似ていた。早く寢床に着いた。遂に無事にすんだ。明日はよい天気であろう。



○1916年9月12日 (火)

晴天。風静かになりぬ。今朝も早く家を出た。上村君に地理帳を貸して上げた。剣道は全部着けて稽古をした。家へかえって20分ほど休むうちに、何だか外がやかましい。目をさまして聞けば「飛行機2台、飛行機2台」と、隣の永野が大きな声で呼んでいた。ほかの子供もさわいでいた。話を聞くか聞かないうちに爆音はげしく耳に感ずると思えば、飛行機の姿は空近く明瞭にうつった。そのため僕の眠気もさめた。それから、インクと鉛筆を買いに出掛けた。夕方、靴を磨いた。それから博物、英語、歴史等の復習をやり、算術の先をやり、国語をやった。その間に湯に入った。ちよつと気がついて窓に近づき、月はどうかと見たけれども、空は暗く星も出ていなかった。

○1916年9月13日 (水)

雨天。今日初めて雨が降ったので気持ちがよかった。ちよつと長くつづきそうであった。しかしそれはよいが、運動が自由でない。昼休にふと窓の外を見ると、四つ五つ柿が赤くなっていた。朝は飛行機が雨中を飛んだ。家の屋根の上をとおって行った。雨中の飛行はじめて見た。勇ましかった。「雨空の飛行機影のスケッチあり」あまり大袈裟である。

(印象を誇大した所か)〔短評〕

○1916年9月14日 (木)

雨天。今日、学校からかえって英語を復習しようと思つて In to the rain の所を読もうと思つて、開いて It began to rain. と読んだ。すると雨がその時、一時やんでいたのが、ぽつぽつと屋根に(とたん屋根)あたった。思わずおかしくなった。6時すこし前ごろ飛行機が屋根の斜め上を低く飛んできた。国語の予習をすましたのは9時半。予定の消灯に寝られた。

○1916年9月15日 (金)

曇天。桐陰会会費を持参するのを忘れた。遊動円木はすべてあぶない。今日も学校で飛行機を2台見た。板倉先生の写生なさった絵を今日見せていただいた。何方どちらも気に入った。英語の書取は大抵違いがないと思う。家へかえってまた飛行機の姿を見た。今日は不断より習うことが少なかった。

○1916年9月16日 (土)

霧雨。今日も夕方、飛行機が飛行した。夜9時40分ぐらゐまで起きていた。トランプもやった。本を読んだ。別に記事がない。今日は父の命日である。



○1916年9月17日 (日)

晴天。午前は主に国語の書取をした。午後1時半ごろ、門のこうしが開いた。そのとき大抵、青木君か武田君が来たのだろうと思っっているうちに、姉が「あ、いらつしゃい」といったので、その事は明瞭になった。はたして、青木君と武田君の三人で来た。何処かへ行きたかったけれども、別に行くところもないので家で本を読んだり、ランプをしたりした。4時半ごろからボールを買って来て、毬なげをやった。が随分運動になった。兄は玉川へ、三人ほどの人と一緒に泳ぎに行った。僕もいきたかった。

夜は家の中で相撲をやったり、すじおとしをやったりした。7時半頃、青木君はかえった。兄はまだ帰って居られなかった。武田君もやはりその時かえったが、僕は明日の地理の時間にいる東京・佐倉の地図を買いに行った。先ず電通院に行つて聞いたがなかった。そこで武田君と一緒に坂を下りて行つた。向こうの方を見渡すと、人家の電灯がきらきらかがやいていた。その中に目立って奇麗に牛込館の電灯が闇に家を建てていた。涼しい風がどこからかそよそよと吹いて来て気持ちよい。やがて大曲へ来て江戸川の橋を渡った。あまり景色がいいので僕達は橋の真中で水を見ていた。電灯の光が水に長細くきれぎれに数知れず写っている。水音もしない。まだ人は通っていたが、電車がゴーゴーと音をたてて、風もうなりそうな勢いで往来している。武田君の家は橋の向こう側である。そこで別れて僕は一人、江戸川伝いで飯田橋まで行つた。実に気持ちがよかった。橋をわたり、甲武線〔現在の中央線〕の下を過ぎなお九段の方へ進んだ。九段が見えたのかと思えばそうではなかった。僕には随分ある様な気がした。九段へ来て、ある本屋へはいつて聞こうと思ったら、飯田君に会った。そこで東京だけ買った。佐倉はどこに行つてもなかった。帰りは電車で帰った。ちよつと来たかと思うと「飯田橋でございます」と車掌が云つた。行きに随分あると思つたのが、まるで早く来たので、あつけない。家へかえつて、暫くすると兄がかえつて来られた。9時半に寝た。

(夕方の景をうつした所、実に美しい)〔短評〕

○1916年9月18日 (月)

晴天にて暑し。今日は数学の宿題がでた。しかしやさしかった。宮脇君や上村君とボールをした。2時間目頃から横腹がいたくなつた。剣道がまんをしてやつた。

○1916年9月19日 (火)

晴天。今日、兄にいいつかった事をわすれたので夕飯後に大登美へ、カラをとり、洋服のことを言つて、家の屋根の出たところを伝つて早足で来ると、兄が蝙蝠傘をもつて来てくださった(雨が降った)(大登美で貸してくれるといったけれども借りなかった)。数学の本が見れば、なかったので方々をさがしたがやはりない。



(運のよくない日)〔短評〕

○1983年9月20日(水)

晴天。朝、学校へ来て見れば、机の中に置いてあった。北川先生にその事をお話した。今日も宮脇君と澤君と組み、上村君と僕と組んで一日中した。家へかえって、30分ほどねて、文法の宿題や数学の宿題などして、湯に入り、夕飯を食べて、青木君の所へ兄と僕と姉で行った。僕は先に電車に乗った。時に6時半、春日町へ下りて見ると、随分道がぬかっていた。やはり下であるからであろう。電車の中は混雑した。白山下に来たときは、立っているものは僅かであった。小学校の阿部先生に御会いした(図書先生)。白山上で下車して大通りを風に吹かれながらぶらぶらと歩く中に兄と姉が後からいらっしやった。「白山下、白山上、さかな町、大通りの地図(スケッチ)あり」

青木へ行った。青木君は算術の宿題をやっていた。しばらく遊んでいるうちに、予防注射をしてあげると、皆に叔父〔註：青木病院を経営〕がおっしやった。僕等は悲観悲観といつて下に下りて来た。初め兄がした。その次に青木君がしたが、青木君がするとき二人で逃げたがやった。

(そんなに「悲観悲観」と云うにも及ぶまい)〔短評〕

いたくないという。僕もすましたが、いたくなかった。皆で10人程した。僕はちよつと用があるのですぐに帰った。ほかの人はランプをするそうである。こんどはさかな町から乗った。道は涼しく実にもつとこの通りを歩いていた様な気がした。駒込館で黒い箱をやつて居った。その途で御輿みこしにあった。停留場へ来ると小学の6年の1学期から合う夕刊の老人が鈴をならして、口の中で「夕刊が1銭、夕刊が1銭」といつている。そばを通らなければわからない。この間までは鈴がなかったが、いつ買ったのか鈴をふっている。電灯の光に見ると光っていた。電車に乗ると僕の外に7人だけ乗っているばかり。また車内も涼味を感じた。大塚車庫前行もやはりすいていた(ほかに3人)。すこし勉強をしてねた(ねにくかった)。

○1916年9月21日(木)

兵式体操を今日は休んだ(予防注射)。見学は中学へはいつてから初めてである。立って見ているのは却つてするよりもつらい。ちよつと見た所では楽なようである。9時消灯。

○1916年9月22日(金)

晴天。図書は大馬力で1時間の中にしとげた。ほかにもあった。書取は四つ違った。英語の Dictation [読み上げられる外国語を書き取ること] は Sweet 先生の後なので時間がすく



なくなったので、大急ぎでやったのできたなくなった。一つ違ったと思う。剣道は休んだ。次の作文の時間に読んだ宮脇君と菊池君の文は感心した。注射した所のいたみはなおった。晩に蟬が飛んで来たのでとって、空のあいた箱の中に入れて夜露にあてるために屋根に出して置いた。9時半頃、床についた。

○1916年9月23日 (土)

雨天。今日は秋期皇霊祭である。午後9時半頃、雨が少し降っていた。兄と僕とで染井の墓地にある家の墓に参った。兄はほかへそれから廻ったが、僕はすぐに家へかえった。昼は萩餅を食べた。その前、人の家にそれをもって行った。6時頃、家を出て、二度目の予防注射をして戴きに青木へ行った。7時すこし前にしていただいた。今日は一度よりずっと良かった。その上、僕も青木君も大人の太針で3倍いれた。それがすんでから隣の吉原の叔母の家へトランプを持参して、トランプ二つにしてやった。丁度皆で8人居たので2組に分かれ、1組で一つのトランプをやる(くらぶ、だいや、はあと)。この3回やっては多数をとって計算する。その計算する度に点の多い人4人をとって、それをつよい組とした。10時半までやった。面白くて眠気はこなかった。初めは僕はとびぬけて一番であったが遂に一番下から二番目になった。夜、寒かった。家へかえって随分寝にくかった。後が非常にいたい。

○1916年9月24日 (日)

雨天。晩は不断と違って寒かった。朝もちょっと寒気を感じた。さつそく蟬を見たが、まだ生きていたが飛べない。午後すこし読書した。午後、勉強をした。今日は雨が降つてこの頃になく気持ちが静々とした。雨の音を耳にやわらかく聞きながら机に坐つて居ると、なんとなく涼しくして目が明白になり身がひきました。これから一雨ごとに涼しくなつて行くのでもあろうか。10時頃、普通よりすこし遅く電気を消した。今日、仙台に手紙を出した(仙台の兄)。

○1916年9月25日 (月)

朝礼がすんで僕等が森本先生が作文の時に用う洋罫紙を持っておいでになるのに目がついて、皆でしまったなあといった。はたして修身の時間に勅語書取があった。今日の地理は筆記することが多かった。この頃、数学はやさしい。今日も宿題がでた。国語の時間の初めちよつと先生が書方をためしたださったが、僕は忘れていたのでさつそくやらなければならぬと感じた。家にかえって書を少し読み、宿題をすませ書取を練習した。なお外の課目をやった。



○1916年9月26日 (火)

正午後の遊びで東西遊記抄の時間はぼんやりしたが、できたことはできた。もうすこしでズボンは白くなる。そう思うと急に寒くなる様な気がした。晚になると、燈を便りにしてミンミンという蟬が飛んできた。またその蟬を箱に入れた。数学の宿題は遂に出さなかった。

○1916年9月27日 (水)

晴天。今日はもう注射した所はいたくないので、体操をやった。晚、青木の実さんがいらつしやった。兄と三人で遊んだ。今日も暑く、汗がでたので体をふいた (帰宅した時)。9時半すこし過ぎにねた。

○1916年9月28日 (木)

地理の1時間は面白かった。兵式体操の時間は半分お話があり、後は五分五分に教練と遊戯をやった。日記を学校へ持参したけれども、つい忘れて出すことができなかった。家へかえって静まっていると、涼しさをこしぞくつとするときがある。人のよく風邪をひく時であろう。僕は晚、風邪をひいた様子もなかった。晚湯に入った時は暖味を感じたのでよい気持がした。兄が佐倉の地図を買って来てくださった。蟬はまだ生きていた。すこし遅く寝た。

(誠によい日記である。漢字をなるべくしらべておかきなさい) [短評]

○1916年9月29日 (金)

曇天。寒気を感じず。今日、国語の書取かと思えば、そうではなかった。この間、英語の Dictation [書取] に違つて今までに無い大失敗をやったから、今日こそは取り返したつもりである。2時間目と3時間目の間の休みに例の壁に毬を当てて点数をとる遊びをし、また松永君と組むことにきめた。上村君と中島君の組とやって失敗したので、昼休みに見ん事復讐戦にも甲斐あり、遂に破った。これから大いに方々の組を破る為に稽古中である。

英語の時間の終り、先生が休み中に英語を習ったものとおっしゃった。僕はこのとき、しまったと思った。休み時間、spread [広がる] という綴りを忘れたので、ちよつと見せてもらった。残念なことをした。これから其の様な事をしないこと (総ての事について) を先生と約束した。剣道の時間は英国の軍人のミッチェルという騎砲兵の大隊長 (少佐) の勇敢なめでたい現在ウエルダンのある所の戦争と、その人の日本の剣道を貴んだお話をしてくださった。感心した。家へ帰って、頭髮あまりに延びたので刈りに行った。刈った後はよい気持になり、眠気も何処かへ消えてしまった。9時半、床に着く。

なおぬけた所があった。寝へかえるとすぐ大久保彦左衛門の所を短縮して書く宿題をやつ



た。出来るだけ縮めた時、心配しながら数えて行く中に四百にもなり五百に近くなる。数えると丁度、五百字あった。今日はそこで止めて置いた。雨は降らなかったけれども、太陽を見ることが出来なかった。一日、雲は幾重にも叢^{むら}がって居た。

○1916年9月30日 (土)

朝、快晴。昼間、晴天。夕方、雲遠く去る。寢床より起き上がれば、前の障子は開いていた。日影は向かいの家の屋根にかかっていた。晴々とした秋空である。朝、学校の運動場で仰ぎ見れば、眼界には一点の雲だにあらわれない。ことに朗らかである。兵式体操及び体操(合併体操)の時に、見学者の思いの他多いので驚いた。昼食をすまし、base (baseball 野球の略か)をやった。それから広瀬君と二人で第二運動場で遊んだ。それから山岳部の展覧会を見て、山岳についての演説は数多うかがった。終ったのは5時すこし過ぎであった。伊藤と二人で道を急いでかえった。二階へ上って何の気なしに、空に三日月が細く淡く見えるのに目がとどまった。西の方に雲が長く横に線を曳いて去ってゆく様子である。湯が出ていた。

○1916年10月1日 (日)

曇天。7時に起きた。顔を清めて靴を磨いた。兄も磨いた。午後、博物を清書して色を塗った。また作文を清書した。また直すと直るので直して書いた。全体で489字であった。一日今日は家に居た。また誰も来なかった。嗚呼、最早秋の中旬の初である。時を思えば寒い様な気もする。時に傍らより風が吹いた。ちよつと寒く感じた。

○1916年10月2日 (月)

雨天。急に冬服になったので、変な気持がした。上衣は夏服を来て居た。靴が新しいので学校でちよつとたたかれた。国語の時間に、「■」「(壁の字の土を石と書く)こんな変な無い字を書いて醜態をやった。外に記すことがない。9時半に床に入った。

(醜態ではない) [短評]

○1916年10月3日 (火)

雨天。今日は僕の予想のとおりには帰りには激しい雨が来た。広瀬が傘を持って来なかったなので、入れてあげた。飯田君も困っていたから車庫前まで入れて上げた。三人であるから皆都合よく寄り合つて牛よりも遅く歩いた。今日もまた記事がない。

○1916年10月4日 (水)

曇天、雨天(午後5時頃より)。国語は巻2の第1課であった。体操の終りに遊戯をやった。



甲乙に分かれて徒歩競走をやったことである。面白く感じた。この時、僕は味方を加勢する心があつく起こった。学校のかえり、門の所へ広瀬君と長島君と三人で来た。小学校の方から石黒先生がいらっしゃったが、僕はよくわからないので礼をしなかった。門を出て、御後影の様子によると、石黒先生であるということが明瞭にわかった。晩、九段まで地図を買いに行った。夜はすこし遅く寝た。

(10月5日閏。まじめなよい日記です)〔短評〕

○1916年10月5日 (木)

曇天。今日、国語の2課を読んで面白く感じた。この話に似た話は諸葛孔明しよかつこうめいの或る話に似ている。今日の事は随分考えて筆が動かない。

〔註：諸葛孔明。蜀の劉備に仕えた丞相（総理大臣）で、知略に満ちた軍師であり、忠節の人であり、実務にたけた政治家であり、偉大な発明家でもあった三国志時代の英雄（ウィキペディアより）〕

○1916年10月6日 (金)

曇天。図画はよい図案ができないので家へかえって考えた。学校がひけてから4時までbaseballをした。運動場で雁の未だ見た事の無い様な列を見た（北を目がけて行く）〔雁の列をなして飛ぶスケッチあり〕。家の机から見ると前の後の家の庭に種々のダリや咲き乱れて、その上に瓜の橋架かり瓜青葉の中から2、3本空に下るのを見た。カードに今日の国語の所を記した。

○1916年10月7日 (土)

曇天。正午に弁当をすまし。牧野君、上村君、斎藤君、中島君、見目君、溝口君、広瀬君、岸上君等と第2運動場で1時まで遊んだ。

牧野君と岸上君と上村君と僕とで歩いて学習院へ行った。電車通りへ出て、擬戦〔模擬戦〕をする時に行く道を行った。随分長い間、塵の多い道を通った。山の手線の下を潜り、知らず知らず先へ足を進めた。このわけは坂を下りてすこし行った所から僕が「よ」という字を話の中に入れると一つぶつ約束をして愉快に歩いていからであらう。また「よ」という字を話に必ず入れないと一つぶつ約束をしたりして夢の中に道をすごしたからであらう。よほど行って、その事に気がついた。それは牧野君が子供に聞いた。それから皆はがっかりして引きもどした。こんどは足が急に動かない様になった様な気がした。先の橋の下に来て、意気回復して学習院の門に着いた。

しばらくすると開始された。激しい盛んな戦に天気のこと忘れ全身是れに見とれた。太陽は盛んに照らしているかの様に思われた。勝負の決するまで面白く見ていた。初めは形



勢良好であったが、中頃すこし過ぎた頃、同点となり8回目の表に4点を得たが。

〔回数〕…(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8)

G〔学習院中等部〕…0 1 1 3 0 2 2 ー

F〔高師附属中学〕…1 2 0 3 1 0 0 4

暗くなったのでやめたそうである。しかしこれで勝負が決しないのである。もう一回やって決した方がよいと僕等は皆言っていた。帰りは大塚君とかえった。やはり歩いて近い道を通って来た。その内に坂の下に来た。電光が道を表している。坂の上を電車が通る音が聞こえる。傍らの空に朦朧たる月を見る。寒む気を含んだ風が面にさわる。僕は家まであるいた。大塚君の家は日本橋だそうである。乗った電車の光も光の中に消えてしまった。一人でゆつくり歩いて家に着いた。別になにもしなかった。やがてねる時刻も来た。

(また17日にやるということです)〔短評〕

○1916年10月8日(日)

曇天、東北の風。7時半に起きた。9時から勉強した。勅語の書取を稽古して一番終りに自分で暗誦して書いた。自分でやるからすこし考える時間もある。出来て、調べて見ると一つも違っている所はなかった。それがすんで、ちよつと毬を投げそこなつて隣の中に入った。毬は見えていたので、長い棒をさがして(竹)、われた所に勝^{また}になつた木を挟んで、屋根の上から隣の家に竿を延ばして数回の失敗の後、遂に挟み無事に取つた(竹に挿した二股の小枝で毬を挟んで取るスケッチあり)。しばらく鮎と金魚を見なかった。どんな様子か見て、飯粒をやつた。午後からも何処にも行かなかった。4時頃から本を読んだ。

(なかなか巧みなことをやつたものです)〔短評〕

○1916年10月9日(月)

雨天。今日は勅語の書取はなかった。数学は矢張、北川先生が御休みになつて、今日は山内先生に教えていただいた。笑う所もあり真面目な所もあつて、面白く教わつた。この頃、晴天の日がすくなくて久しく日光にあたらない。

○1916年10月10日(火)

雨天。また今日も雨が降つた。広瀬君を傘の中に入れてあげた。剣道は段々興味が出て来る。雨の降る時は気持がよい。

○1916年10月11日(水)

晴天。今朝起きて見ると、障子に日の影が映つて室が暖かい様な気がした。起きれば、天は青く見えるばかり。雁の飛んで行くのを見た。今日はひさしぶりで外へ出た。英語の



Dictation「書取」にしくじった所があった。夜、二階から見ると、木の影が屋根の青白く照らされている上に薄黒く映っていた。或る窓から見ると、澄み渡った清い空に澄みきった月が出ていた。星も空に点々と輝いていた。寝るすこし前に見れば変な雲が出ていた。先生が今日おつしやったのもこのことであろう(晴れたと思えばたちまちに雲があらわれた)。

(10月12日閏。相変わらず面白く拝見しました)〔短評〕

○1916年10月12日(木)

午前曇天、午後2時頃より雨降る。2年が修学旅行で田中先生は御出になった。1時間目は合併であつた。黒石先生から有益なお話をうかがった。兵式体操をやっているときには、一時雨がやんでいて。帰りがけに降って来た。電車通りの道の乾いた所に雨が下ちてそれが沁みて、いかにもかるい気持のよい音がする。今日家へかえつて栗を食べたが、実が満ちて大きく非常にうまかつた。雨はなお時の経つに随い強く降る。ちよつと景色を見れば、木の葉は風に乗つてひらひらと落ちる。枝には、著いている葉は(桜の木)半ば落ちていている。

○1916年10月13日(金)

雨天。学校から帰つて、ちよつと下の縁側を通りかけたとき、ふと足下の金魚鉢に目がつき蓋をあけて見ると、以前に釣つた鮎と金魚はじつとしていた。それから僕は□□をちぎつて遣つた。喜んだ様な顔をして上へ浮いて来た。明日は愈々、安行^{あんぎょう}へ遠足に行くのであるが、天気模様が危ない。大抵、雨天であろう。空模様がよくない。しかしすこしは用意をした。用意を整え9時半に床に着いた。

(□□?かなでなりとかきなさい)〔短評〕

○1916年10月14日(土)

晴天。5時半に目がさめた。すると間もなく女中が戸を開けに来た(僕にはその戸は閉めることが出来ない)。すぐに僕は片方の雨戸を開けた。霧が下りて霞んで居た。雨は降って居なかつた。支度をして6時10分前に家を出発した。纔^{わず}か10分程の間に電車が3台も引き続いて来た。僕は4台目のに乗った。車内には立つ人まで2、3人居た。御徒士町^{おかち}で乗りかえて千住大橋行に乗った。6時20分下車して歩いて行つた。自分一人なので何だか遅い様な気がしてつい足が早くなつてしまった。すぐに大橋を渡る。橋の半辺で暫し朝の川の景色に見とれていた。太陽はまだ鉄橋の上に懸かつて居た。八百屋の市場でもあろう。家々立ちならんで盛んに売買して居る。時間は見なかつたが、半道ありようにも思えなかつた。同級生2、3人ほど僕よりも先に来て居た。やがて上野発の汽車が到着した。その時、一時に大勢の人が下りた。あきるほどまつていた。その中に6時40分も来た。人員点呼をして人数を調べた。



汽車の中から外を見た景色を賞して写生などする中に早くも下りるべき停車場に着いた。天は雨を降らす模様がない。15町ほど行った所に川があった。その川を渡った所に白い線が地上に敷いてあった。そこから例の歩測を始めた。誰も物を云うものがない。唯、片手に紙を持ち片手に鉛筆を持ちながら歩測して行く。僕は随分先の方であった。安行へ着して出き上った。米は2309米メートルになった。11時5分まで鐘を突いたり、穴の奥の方へ這入って見たり。その辺を方々見た。宮下先生が弁当を食べ始めてよいと命令が下ると、僕はたちどころに2、3人の者とごぎの上で歩きました。皆残さずたいらげたので、満腹になった。それから4、5人の者と連れ立って、或る道を伝って2、3軒の家を見廻って、シャボテンを買った。その中に時が来たので三重の塔を目がけて早足でもどった。道に三つの穴を見た。帰って見ると、歩測して出した答えの標準に近いもの30人だけ発表してあった。美濃部君の一番には感心した。2米の差は全く合ったと云ってよいと思う。その事について色々お話があった。中島君と上村君と僕とで帰りにすこし遠道をしてシャボテンを買った。学校で頂いたお菓子は二つ食べて残したのを上村君の鞆に入れてもらったが遂に忘れてしまった。富士も見ることが出来た。帰路でも飛行船を見た。電車の中で眠くてたまらなかったが、家に着くと何時の間にか眠気は飛んでしまった。ちよつと疲労を感じた。9時頃、寝た。

(愉快な一日)〔短評〕

○1916年10月15日 (日)

雨天。今日は朝から降ったりやんだりして天気が限定しなかった。それに本校の運動会が開かれたので驚いた。武田君が来た。都合がよかったら学級会雑誌に出すのを書こうと思つて居たが書けなかった。毬で色々な遊びをしたり、少年日露戦史を引きだして読んだりして、午後2時頃から費やした。今日は友達が来ないとよいなあと思つていたのを、少し予定がくるった。

○1916年10月16日 (月)

晴天、青空殊に多し。地理の臨時試験はこの前よりもよいと思う。北川先生は未だ出ていらつしやらない。国語は或る日ごとに暗誦がある。思えばシャボテンがまだ植えてなかった。夕飯すんで、砂を持って来て土と混合して植木鉢に植えた。まだ感心に枯れてはいなかった。

○1916年10月17日 (火)

晴天、雲甚だ少なし。今日は神嘗祭かんなめさい〔毎年10月17日に伊勢神宮で執り行われる五穀豊穡の感謝祭〕にお供えし、感謝するお祭りなので学校の事業はなかった。午後1時から学習院と仕合するのでその積もりで僕は家を出たが、矢張前と同じく2時からであった。大塚まで歩い



てそこから山の手線で目白まで行つた。4、5人の友達に会つた。僕は太島君と永井君とで椅子を持って来て腰掛けた。

〔回数〕…(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10)

G〔学習院中等部〕…1 0 3 1 0 1 0 1 0 0

F〔高師附属中学〕…1 1 0 1 1 0 0 2 1 0

遂に此の如くなつた。前の仕合の時と同様に7対7で勝負は決定しなかつた。最後の9回、10回の戦いは我が選手の気、満ち満ちていてFirstに行くまでに殆ど全くoutにした。椅子からはいつの間にかはなれて一心に見て居たのであつた。僕の胸は時々して居た。今日のおわりの方の仕合は今までになく非常に愉快であつた。残念にも再び同点になつた。1時から始まつたならば或は勝敗もついたかも知れない。帰りは宮下君と芳賀君と一緒に早足で来た。6時頃、帰宅した。今日は9時頃寝た。(なお昨日の夜半にツェッペリンに乗って太平洋を横断した夢を見た。これが夢でなかつたならば如何に壮快であろう)。

○1916年10月18日(水)

晴天。国語の時間は書取であつた。今日から上村君と組を作つた。他の組と毬ぶつけをしたが、4組ほど仕合したが、全勝を帰した。シャボテンは前よりよほど大きくなつた様な気がした。

(氣ばかりではない、ほんとうでしょう)〔短評〕

○1916年10月19日(木)

午前晴天、午後雨天。兵式体操の時からポツポツと雨が落ちた。今日は初めて運動場を4、5回廻つた。顔色は誰も赤くならないものはなかつた。帰つては別に記すことがない。

○1916年10月20日(金)

雨後晴るる。図画の模様はよいのを考えた。剣道は武装競争の様なことをした。帰宅して日記をつけ、勉強をしてイソップを読んだ(芳賀君から借りた)。

(10月21日閏、まことにこまかくよくかいてあります)〔短評〕

○1916年10月21日(土)

快晴、夕方雲すこし見える。風すこしあり。博物はこの次から動物に変わるものである。今日は全く雲はなかつた。作文を書いた。僕は学習院に行かなかつた。兄にこの次から行くものだといわれた。

(そうしない)〔短評〕



○1916年10月22日 (日)

晴天。7時起床。午前は歴史と作文を書いた。早稲田とセントルイスとのボールの仕合を見に行かなかった(親類の者4人と兄とで行った)。午後から勉強をして本も読んだ。中央幼年の兄はまだ外出を許可されない。

○1916年10月23日 (月)

晴天。剣道は3本勝負の練習をやった。数学はこの頃、四則応用をやっている。今日は招魂社に行かなかった。(外に記事は思いつかない)。母が夕方、仙台から帰って来られた。

○1916年10月24日 (火)

晴天。朝、学校へ着いて靴をはきかえて運動場へ来た時、2鈴が鳴った。2時間目は歴史の試験があった。また中古史に入った。今日は動物に移りいなごをならった。剣道は紅白勝負の練習をやった。剣道場から出て来た時、南風が冷やかに面にさわった。

帰り途、まんじゅう屋が煎餅屋に転業していたのに気がついた。仙人掌シャボテンに子が出た。

(めでたし、めでたし) [短評]

夜に戸を閉めようと思うと、空には墨汁を流した様な雲が暗くとざしていた。9時頃少し早く床に着した。日の西に隠れる頃、蝙蝠こうもりが空に餌をさがしに飛び廻っていた。

なお書き忘れたことがあった。4時頃、僕は「あの大きな金魚が」と言っで急いで二階から下りて見に行ったらと僕につづいた。僕は「あの大きな金魚が」と言っで急いで二階から下りて見に行つた。すると大きな僕の好きな金魚の影が見えない。ただ鱗が、よほどものがいたと見えて4、5枚水の中に沈んでいた。縁側には瓶の水がこぼれて、庭には血のついた鱗10枚ほど落ちていた。如何に金魚は力を尽くして逃げ廻つたであろう。実に思ひやれば、惨なことである。鮒は保護色で捕えられなかったが、驚いた様な顔をしていた。どの猫かわかった。その猫の姿は何処にも見えない。この事は25日に書いた。それはその猫が向こうの家の屋根の上をのそのそと歩いていたのを見て思いついた。声をかけると猫は此方を見たので、僕はじつと睨みつけて遣つた。僕はよくよく猫の敵である。

○1916年10月25日 (水)

晴天。朝、南風に吹かれながら学校へきた。学校の運動場に来ると急に冷やかな北風に変わった。その変わりかたこそ明らかであった。数学の時間、物理の谷田澤先生から主に燈台のお話をうかがった。この1時間は実に有益で且つ面白かった。無線電信のことは半で終った。英語の Dictation に so と saw を逆に書いた。〔六面折射照光器のスケッチあり〕



○1916年10月26日(木)

雨後曇。地理の時間は銚子の修学旅行に関して説明せられた。授業が終って階段教室で実地を写した幻灯を見た。これですこし向こうの様子も知った。学校の帰り道で風の空に上っているのを見た。数学の宿題で500までの素数を出せという問題が出た。500まで数字を書くのも骨が折れた。

○1916年10月27日(金)

晴天。剣道の紅白勝負には何等の功もなし得なかった。しかし、全体としては勝利に帰した。

(あれでよし、あれでよし。なかなか勇敢であった)〔短評〕

4時半頃、家に着いた。どのPostもペンキが塗り換えてあった。今日は10時頃寝た。

(10月28日閲。やがて旅行です。身体を大切になさい)〔短評〕

○1916年10月28日(土)

晴天。今日は2日目の剣道大会であった。終りまで面白く見た。自分の仕合は敗戦をして席に引きかえた。別に大会について記すことが思いつかない。

○1916年10月29日(日)

雨天。午前中、家の二階に居た。午後1時半頃、中央幼年の兄が初めて外出を許可されて、帰って来られた。この頃、外から松茸をよく戴くので、松茸の羹、松茸の御飯等である。

○1916年10月30日(月)

晴天。記念日。今日は夕飯をすませて、武田君の家に遊びに行った。10時頃、家に帰った。

○1916年10月31日(火)

晴天。天長節。電車通りへ出ると、立ち並ぶ家々の国旗はめでたさ顔で閃いていた。電車の上の旗もめでたく思わせる。学校で式があった。夜の天候はすこぶる怪しかった。星が非常に出るかと思えば、一つも見えなくなったりする。翌日の晴を祈っていた。

○1916年11月1日(水)

晴、曇天、後雨天。修学旅行。

4時10分に床を離れた。天気如何と見れば、雨は落ちて居なかったが甚だ怪しい天候である。支度を整えて5時10分前に家を出る。幸にも天からはなにも落ちない。竹早町の停留場へ行って、5時の来るのを待っていた。外は人影絶えて、戸々の電灯の光朦々として薄暗い街路を照らしている。その中に伊藤君と岡山君が来たので、僕も一緒に歩いてい

た。伝通院に来て見れば人が電車の来るのを待っていた。伝通院で乗れば4、5人の友達が居た。5時30分には間に合った。多くの友達が時待ち顔で停車場に居た。聴^{やぶ}て5時50分と共に汽車はPlatform「プラットフォーム」を離れて郊外に出た。人家は東京市を離れるに随って少なくなる。荒川、中川、江戸川、地図に表す順に汽車は過ぎる。広々とした田園をしばらく両側に見る。汽車の中で地図を広げて走る所を指すのも面白い。我孫子に7時12分に着した。次に成田鉄道に乗り換える。布佐で手賀沼を見た(7時42分)。まだ朝の事であった。次に松崎で印旛沼を見る(8時15分)。沼の水は白く、後の山は薄青に近く、稲を沢山ならべて乾かす。殊にのどかな景色で気も精々する。

〔註：汽車中の写生のスケッチ5図あり。関東平野の特色(榛^{はん}の木を応用して稲を干す)、松戸で見るプラットホーム(軽便鉄道、単線、松戸より野田)、布佐の手賀沼、松崎より見るW字形の印旛沼、沼上の舟(舟中に笠と蓑をつけた人影)〕
〔図がなかなかよくかけています〕〔短評〕

しばらくして佐原に着く。すぐ伊能忠敬先生の御座所と伊能忠敬先生の遺物などを見せ、戴きに行った。そこで量程車、彎窠^{わんからしん}羅針、地図、測量日記、家訓、贈間宮倫宗序、半円方位盤等の物を見た〔量程車、彎窠羅針、小方位盤、半円方位盤の図あり〕。

地図には、大図(イ)、中図(ロ)、小図(ハ)とあった。(イ)は214枚(全国)、(ロ)は8枚(全国)、(ハ)3枚(全国)。

その次には佐原中学に行った。柔道場で昼食をすませた。長さ4尺1寸6分、頸のまわり8寸5分、胸のまわり7寸、重さ1貫300匁ある鰻を見た。利根川で棒で打って殺してとつたという事である。鮒の1尺3寸もあるのを見た。僕は伊豆伊東で長さ1間もあるだろうと思われる鰻の子を2匹見た。その親は年に1回位、岩の陰からでてくる位で、その大きいことは驚くほどであるということである。

佐原中学を出て、香取神社に向かった(香取神社、^{ふつぬしのおおかみ}経津主大神を祭る)。坂をのぼると前方に大鳥居立ち石段もその所に見える。その四囲は太木の森で奥ゆかしく感じた。幻灯で見た香取神社も今や実地に来ていた。参拝記念絵葉書や香取大神宮御守護を買った。参拝して津ノ宮に下りて行く。かなりあった様に思われた。ささやかな汽船に乗って利根川の河口にある銚子をさして下った。雨中の茫然とした景色を両側に眺めながら下り、かわらぬ眺めに飽きて、船内の機械などを見る。しかし水の上を下って行くのはよい気持であった。いよいよ銚子のま近くなる時、砂丘を見た。あまり感服したので写生をした〔船中より見たる利根川の岸、一番壮大なる砂丘のスケッチあり〕。

銚子に5時35分に着した。薄暗い銚子の町を知らず通りすぎて、軽便鉄道に乗る。僕の臉は開こうとしても開かぬほど眠気がさして来たので、まかせて下車するまで眠りに陥った。山本君が僕に燈台の光が見えるよと云ったのが耳に入って、ちよつと目を開けると遙かの闇に電光を見た。何だか元気が付いて、それからは目は閉じようとしても閉じられないほ



ど明らかに開いて来た。間もなく下りる。下りると寒風が面をすべると共に寒さ身に沁む。余程あると思えば、思いの外近かった。着いて、鞆、外套、帽子等置いて、食堂にあつまつて夕飯をすました。非常に愉快に面白く食べた。後にトランプをする。また絵葉書も買った。茶話会が8時から始められた。先ず先生方から今日の皆の様子、調べ方などについて、また明日の事の注意などのお話があった。次に1組から6組まで組毎に誰か出て何かした。終わったのが10時頃であつた。それから名々室々に入つた。その時、床が敷いてあつた。室にかえつた時の皆の顔は喜び嬉しさに満ちている。即ち騒ぎ出す。しかし僕等の組は11時半には眠つてしまつた。朝は5時15分頃、真に床を離れたそれまでは、眼は開いていた。前日の疲れは全く回復した。

(感心によくかいてあります)〔短評〕

○1916年11月2日 (木)

晴天。朝、海岸へ走つて出た。寒くはあつたが殊に清い空気であつた。これから行くべき燈台、霧笛は手に取る様に峙^{そはだ}つて見える。残念にもペンキ塗り換えて上ることが出来なかつた。8時に暁^{ぎようけい}雞館を出発した。燈台に上らなかつたので燈台を見に来た様な気がしない。霧笛は大規模に出来ていた。そこで日時計を見た。それから燈台の所を立ち去つて、海岸を伝つて進んだ。波と追い駆けつこをしながら行くのも面白かつた。

余程長い道を経て無線電信の所在地に着した。僕は先方の方であつた。あまりに高いので驚く。長さ2丈〔約6m〕程あると思うものが22ほどあつた。無線電信を聞くものを耳に当てて聞いた時、小さい音でカチズーカチカチなどと聞こえた。黒鯛をその付近で釣つて居るのを見た。また釣れる所も見た。〔無線電信のアンテナと釣り場のスケッチあり〕

それから本銚子町にあるヒゲタ醤油を見物に云つた。そこで初めて醤油を造っている様子を知つた。(大豆をむして小麦のいつたのを粉にしてそれと一緒に3日間程こうじ室に入れてこうじを造る。そのこうじを塩水の中に1年間入れて置くと醤油が出来る)。そこで明神を見た。鉄で出来ていた「明神」の祠^{ほくら}のスケッチあり。

(屋根などよくかけています)〔短評〕

銚子町の家の屋根に貝や石で作つてあるのを沢山見る。草の中を歩くといなご〔?〕が沢山飛び立つ。牛の食糧にするために芋のかすを乾かしているのを見た。

午後2時すこし過ぎに銚子停車場を出発した。帰りは総武線で来た。初めの中は調べたけれども、後には皆で銭まわしなどの遊びをした。奇麗な夕焼けに富士が写つていた時はよい景色であつた。蝙蝠が蝶かの様に空に飛びあるいていた。東京に着くと、市街の明るい電灯ばかり目につく。2、3人の友達と一緒に帰つた。帰宅して着物と着換え物の始末して気がゆつたりとなつて、二日間のことを追想すると夢の様に思われる。今朝、銚子の海岸を眺めたことも2、3日前のこの様に思われる。ただ燈台に上れなかつたことだけが残

念である。欠伸が二度程続けて出た。疲れても居るので早く床に着いた。

○1916年11月3日 (金)

晴天。立太子式りつたいし〔天皇が日本の皇太子であることを内外に宣明する国事行為たる一連の儀式で皇室儀礼の一つ〕。9時半から式があつた。学校から帰ると伝通院に記念葉書と記念切手を買に行つたが、10銭の切手ががなかつた。武田君と青木君の所へ遊びに行つた。毬投げを盛んにした。夜、四人で隠れん坊をした。またトランプもした。3時頃から愉快に遊び暮らした。帰つたのは9時すこし前。作文を書いてねる。

○1916年11月4日 (土)

晴天。明日、馬場先の奉祝門を見に行こうと思つている。まだ花電車も見ない。絵葉書を見た。兄が10銭の切手を買つて来てくださった。

○1916年11月5日 (日)

晴天。日記を書いていると、外で「花電車！」と怒鳴つた。騒がしいので出て見ると、電車の後をすこし見ただけで見そこなつた。その時、伊藤君に逢つた。次に出た時は2台確実に見た。その時も伊藤君に逢う。また午後2時頃来たので違うのかと思つて見れば前と変わりはない電車である。孔雀が居て万歳と書いてあるのと、真中に木があつて雀や兎等の居るのとである。夜、伝通院へ行こうとすると、また伊藤君に逢つた。三度も一日にあつておかしかつた。6時半に電車が車庫を出た。電気を着けると日昼とまるで違つて奇麗であつた。花電車の次の電車に乗つたので常に春日町まで前に見た。大変な人ごみであつた。奉祝門を十分に眺めて、宮城の前に行つて最敬礼を行つて戻つて来た。電光の明るさで目がちらちらする。よくよく見通して日比谷に行かずに家へ向かつた。

○1916年11月6日 (月)

晴天。地理の時間には東京名所の幻灯を写したがなお時間を不足した。

○1916年11月7日 (火)

晴天。歴史の時間に地理をする。数学の宿題が出た。

○1916年11月8日 (水)

晴天。文法の宿題は10題出たが、それは試験にすると言われた。家に着いて二階の障子を閉じようとするとき非常に長い雁の列を北へ向かつて来るのを見た。この頃10時頃寝る。

○1916年11月9日 (木)

雨天。この度習字の清書は書き悪^{ニク}かった。今日は気持のわるい雨が降りつづけた。柔道の大会を4時まで見ていた。夜は非常に風が吹き、聞いていても冬を感じる。今日は母の誕生日であつた〔小池光子 1869/11/9 生〕。

○1916年11月10日 (金)

雨天。朝一時雨はやんでいたが、学校へ着くと音もしない静かな雨が知らずの中に降つて来た。3時半まで柔道を見て帰った。他に書く種がすこしもない。

(11月11日閲。なかなか努力したものです)〔短評〕

○1916年11月11日 (土)

雨天。水が非常に冷たくなつた。北へ行く雁や南へ行く雁を見た。

(新米の客ならむか)〔短評〕

○1916年11月12日 (日)

晴天。7時起床。天気はわるいと云う程でなかった。兄と親類のもの三人で渋谷から散歩をした。8時半に家を出て、中渋谷に行つた。中渋谷を出たのが10時すこし過ぎた頃であつた。暫くすると、森や畠、田等のある田舎道に出る。森等その辺は西郷従徳の所有地である。道には落葉が散敷いている。椎の実も転がつていた。そこを過ぎると、農科大学に出る。中に入つて見た。あらゆる木に名札が立っていた。畠等もあつた。大麦の種類、小麦の種類、種々様々あつた。まだ芽で小さかつた。何れも見える所では変わりがない。其の地種々の野菜が植え連ねてあつた。銀杏^{いちよう}の葉は黄にそまつていた。空を見たが、一面雲に鎖されていた。それから、一里余歩くと水道の水になる川に出た。幅一丈位の芝生が内側両面にあつて、その外に土手がある。なお外はすこし近くなつて畠がある。橋が数多架けてある〔畠、土手の草、川沿の芝生、川、橋の地形の断面図あり。川の下の特ネル(この中を通つてみた)のスケッチあり〕。風はあまり強くは吹かなかつた。大根は緑をおびて畠に満ち、森は紺青所々に固まつて見える。秩父の山々は薄青の色を持して遙かに肩を並べて立並んで居た。その他人家など種々と下に景色を並べている。手本には小川がゆるやかに静かに音もたてずに流れている。四圍の好風光に包まれ、清い空気を吸いながら暫く歩いた。その気持は実に仁丹等の及ぶ所ではない。一日そこに留まつて居たい気がした。

丁度、昼食の時刻なので昼食に着いた。此処で遊んで長い間居た。此処で月見をしたら如何によい景色であろうと思つた。時は人を待たずで次第に次へ次へと移して行く。次にまた1里余歩いて大宮八幡に行く。途に蛇の蛙を呑む所を殺されたと見えて、蛙と蛇が死んで居る所を見た。



群雀が彼方此方と飛び廻って穀物を荒らしている。田舎の景色の特徴である。大宮八幡に参拝して社の広い長い境内でボールをして遊んだ。3時5分に此処を出た。社前に三つの鳥居があった。そこから1里半程歩行して中野へ着いた。日蓮上人を祭った本能寺に参った。なお農事試験場へ向かうとしたが、聊か疲れたので直に甲武線に乗って牛込見附まで乗って、後は家まで歩いた。不断ならば直だとも思うけれども、少し疲れて居るので家まで随分あった様な気がした。家へ着いたのが5時半頃であった。この日歩いた行程は4里半である。帰ると直に湯に入った。7時半に床に着いた。全く一日を愉快に遊び暮らした。11月12日の郊外に散歩に出た記念の葉〔押し葉の貼付あり。ケヤキの葉か?〕。

(附属中学生の日曜祭日の過ごし方として最上のものの一つ)〔短評〕

○1916年11月13日 (月)

晴天。旅行記の準備にそろそろとりかかった。火曜の予習をして寝る。寝た時はまだ早かった。

○1916年11月14日 (火)

晴天。北川先生はまだ学校へ出られない。英語は今、そのの所をやっているが、現在の氣候よりすこし早い。文法の試験の宿題は口語文がまぎっていて、品詞が著けにくくむづかしかった。

○1916年11月15日 (水)

雨の日。朝起きるから、非常に寒い日であった。障子を開けて下へおりるとき、空の雲は薄水色をたたえて、いかにも寒い様に見える。桜の林には葉が殆どない。顔を洗おうとして水の中に手を入れたときの冷たさ。家をすこし遅く出たので早足でなければ間に合わない時間であった。電車道を傘をさして風にさからって行った時は非常に冷たかったが、元氣にあるいたために学校へ着いた時は手は暖かかった。

体操の時間は振るえる程であった。今日は今までにない寒さであった。勿論北風である。その上僕は4時半頃まで地理室に居た。松本君、施川君、伊藤君、森君等と一緒に、益々寒くなる時に学校を出た。夜10時頃、消灯。

○1916年11月16日 (木)

雨天、非常に寒し。今日も昨日に劣らぬ寒さであった。学校から門を出て(4人の者で)電車通りに出た時は電灯がちらちらと付けられていた。道で一種の癪馬ともいふべき馬が道であばれているのを見た。或る一人の馬方が縄を持って来て口の間にそれを入れて、頭の方に廻して固く結んだ〔馬の頭部のスケッチあり〕。そのために馬はどうやら落着いたので

無事歩くことができた。しかし時々、後脚を蹴って車の台よりも高く飛び上る（この頃は雨はやんでいた）。旅行記が忙しい。

○1916年11月17日（金）

一日雨が降る。学芸会。37回目の学芸会である。朝の8時半から午後の4時半までかかった。僕は傘を持参しなかったので、松本君に交番まで傘の中に入れて行ってもらった。後は家までRunning(ランニング)をした。この一日は有益な一日である。また、面白い一日であった。

○1916年11月18日（土）

雨天後晴天。家へかえってから、上村君と一緒に図書館に行った（大橋図書館）。そこには牧野君、堀君（甲）、三島君が来ていた。9時15分前に図書館を出た。天には星、輝々と輝いていた。一ヶ谷の停車場へ来る道を堀君に教わって着いた。日中と異なっていて淋しい通りになっている。僕は非常に腹が空いているので一刻も早く家にかえりたいと思うけれども、電車が早く来ない。大曲で待つこと7分。伝通院で電車に乗ろうとするけれども、満員で乗ることを得ず、常に足を延ばした。

家へ帰り着くとすぐに晩食に着した。思うぞんぶん食べた。しかし、度合いを考えたので、障りは起きなかった。

○1916年11月19日（日）

晴天。朝、陸上飛行機を3台見た（複葉）。一日、家に居た。中央幼年の兄が帰って来られた。5時、学校へ帰られた。

（益々よくなるのは如何にも喜ばしい。表紙に「3」とある故、第3巻かと思うが、第4

巻の更に念の入らむことを祈る。11月20日）〔短評〕

